

大賞(知事賞)

命の授業について

神奈川県立相模原総合高等学校

一年 小野 王海

私が、小学四年の頃、父親が病気で亡くなりました。私は、人生で一番の恐怖と絶望を感じました。その気持ちをふり返ってみると「悲しい」という言葉では表現できない程の感情です。「父親の分もがんばって生きよう」と思い、立ち直ったつもりですが、今も心の中で悲しんでいる自分がいるのを感じています。父親を亡くしてから更に家族を大事にする気持ちが強くなりました。ニュースで人が事故で死んだことや、殺されて死んだという報道を見るたびに、亡くなった人の身近にいる人の気持ちを思い、同情するようになりました。

父親は、私が小学一年の頃に病気にかかりました。四年間、その様子を見てきてとても苦しそうにしている、母親が一生懸命、看病していたことはよく覚えています。三ヶ月しか持たないと言われましたが、寿命を三年まで延ばすことができ

ました。それでも最後に死んでしまいました。そんな出来事もあり、健康管理を大事にし、一日一日を大切に過ごさなければいけないことを教わりました。

命は人が生きるために必要で大事なものであり、儂いものです。生きているということはそれだけです。又、命は自分だけのものではなく周りの人にも影響します。父親の死によって私の生活や人生観が変わりました。私にとって母親は甘えるではなく、守りたい大切な人になりました。家の仕事は「手伝い」ではなく「分担」するのが当たり前という考え方になりました。他には、本を読んでいるときにそういう悲しい場面になると泣かずにはいられない自分になりました。

命はガラスのように脆いやすく、やり直しが効きませんが、人に様々な影響を与えてくれるかけがえのないものだと思いが、そう思います。

教育委員会賞

この手が私にちようどあう

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校 二年 羽富 樹杏

私は、学校の道德の授業で、野辺さんと長塚さんというお母様と娘さんからお話を聴かせてもらいました。

娘の長塚さんは、手の一部分が無いかたでした。私は、最初長塚さんはなんてかわいそうなかたなんだろうと思いましたが。そして、その長塚さんのお母さんの野辺さんも、とても苦労してきたんだろうなと思っていました。お話を聴くと、確かに長塚さんは同級生などから、嫌なことを言われたことがあったそうです。また、野辺さんも、子どもにどう手のことを伝えるか、悩み苦しんだそうです。ですが、長塚さんはこうおっしゃっていました。

「この手が私にちようどあう」

私は、体に不自由がないので、そう感じたことはありませんが、確かに、この顔この体全てが私なんだなと思いました。きつと、長塚さんは、自分の体と真けんにもきあい、そして

受け入れたからこのような言葉が言えたのだと思います。

また、長塚さんはこんなこともおっしゃっていました。

「障害者だからといって、最初から不幸だとか、かわいそうと決めつけないでほしい」

確かに、私は最初、障害者のかたとそのご家族だから、勝手にかわいそうや不幸だと決めつけていました。ですが、話を聴いてみると、つらいなかにも面白いことや楽しいことなど、たくさんの幸せがあったとおっしゃっていました。

私は、障害者のかたに優しくしなきゃと思っていましたが、それは決して間違ったことではないと思います。ですが、「障害者」だから優しくするのは違うのじゃないかと、長塚さんと野辺さんのお話を聴いて思いました。障害のあるかたを「障害者」として見るのではなく、障害も含めてその人なんだと相手を受け入れそのうえで相手に優しくしていきたいなと思いました。

これから、私も障害のあるかたと、接する機会がかならずあると思います。その時は、その障害も含めてその人の個性なんだと思いい相手のことを考えながら接していけたらなと思います。

神奈川新聞社賞

命の素晴らしさ

神奈川県立愛川高等学校 二年 梅澤 汐莉

私は自分の事が嫌いだ。愛想も無ければ、これと言った魅力も無い。最も嫌う理由は、勇気がない所だ。

私は昔、SNSで堂々と悪口を書かれたり母子家庭だと馬鹿にされたりといったいじめを受けた事があった。その上で冷たい態度をとられたりした。それ以降、人と関わるのが怖くなってしまったのだ。同時に罵声や逃避行を嫌った自分は弱い虫だと呪い込んでいた。

思い返す程愛された事も無く、分かり合える程言葉を話せず、気持ちを上手く伝える方法も分からないからハサミを振りかぶる様に近寄らないでと自らアピールしてしまう。自分がなんなのかわからなくなり、命を絶とうと何度も考えた。

ある時、授業で先生が戦争のお話をされていた時、ふと耳に入ってきた言葉がある。「人は何かを成す為に生を受け、成し終えた時に死んでいく。」当時、暗闇に飲み込まれてい

た私の心に光が差した様な言葉だった。人は生まれながらにして必ず何か成すべき事がある。そう考えると、この命は無意味に出来たものでは無いと思えたのだ。命が有る限り、挑戦出来る事は山ほどある。命が有る限り、沢山の人を救う事も可能である。命は本当に素晴らしい。そう思うと心に差した光は青空の様に晴れ上がった。心の底から幸せを感じる事が出来たのだ。

私は人として生まれた。だから人として生きていけないといけない。そして、私は私として生まれてきてしまったから私として生きていけないといけない。そして自分を愛してあげなくてはならない。嬉しかったら笑う事が出来る、悲しければ泣く事も出来る。これが命という美しく、素晴らしいものだと思える。

皆様の命も無意味に出来たものなんかじゃありません。どうか大切に、愛していただきたくないと願っております。

テレビ神奈川賞

生き物の気もち

小田原市立下中小学校 四年 大竹 梨唯那

「生き物の幸せ」の勉強をして思ったことが二つあります。一つは、私が「幸せ」と思っているのも、人間以外の他の生き物は幸せではないかもしれないということです。きょうぼうな生き物を、人間は、自分達の安全のために、オリやサクに閉じ込めたり、殺してしまったりすることがあります。きょうぼうな生き物以外でも自由をうばっているのが動物園です。でも、動物園では、エサがかならずもらえます。とても大切にしてもらえます。逆に自然の中の動物達は危険もあるし、エサも毎日食べられない事もあります。自由があります。どちらが幸せかは、動物達に聞かないと分かりません。二つ目は、校長先生が、「命をいただく」という本を読んできた時に人間は自分の命を守るために、たくさんの命をいただいで生かされているんだと思ったことです。

人間は、肉や魚、色々な食べ物を毎日いただいで生きてい

ます。たくさんの動植物の命が人間のために使われています。でも、残したり捨てたり、とてもムダな事をしていることが多いです。その食べ物の元は、植物や動物です。そんな時、人間は、自分達のために他の生き物の命をムダにしているのではないかと考えてしまうことがあります。

それから人間は、同じ人間の命も大切にしない時があります。イジメです。人をイジメて、心の幸せをうばいます。時には、命をうばいます。イジメている人も、心は幸せではないと思います。

私は、動物や虫などを飼った時は、かわいがって長生きさせたいです。食べ物を食べる時には、感謝の気持ちをもちたいです。

人の気持ちも生き物の気持ちも考えられる人になり、やさしく親切にしていきたいです。

神奈川県PTA協議会会長賞

いのちをいただくとは

海老名市立上星小学校 六年 曳地 祐志

五年生最後の授業参観で「いのちをいただく みいちゃんがお肉になる日」という絵本を使ったいのちの授業を受けました。食肉加工センターに勤めている坂本さんは、牛をと畜して、お肉にする仕事をしています。坂本さんには、しのぶ君という息子がいます。しのぶ君はお父さんの仕事を恥ずかしく思っています。担任の先生からお父さんの仕事の大切さを教わり考えが変わります。

ある日、坂本さんが一日の仕事を終え一台のトラックが入ってきました。荷台には、明日、と畜される牛のみいちゃんが乗っていました。助手席に乗っていた女の子が降りて、「ごめんね。」と言いながら、みいちゃんのお腹をなでました。坂本さんは、この事をしのぶ君に話しました。次の日坂本さんは仕事に行くのが嫌でしたが、しのぶ君に「行かなければならんよ！」と言われ、仕事場に着き、みいちゃんをと

畜する時が来ました。と畜する時みいちゃんが涙をこぼしくずれるように倒れていきました。

この授業で、二つの事を学びました。一つは、いのちを解くということ。解くということは、牛や豚などの動物をと畜し、食肉にすることです。自分の知らない所で毎日命に向き合っている人がいることを知りました。二つ目は、「いただきます」についてです。いただきますを毎日言っていることの意味について考えました。自分は毎日いただきますを言っているにも、意味を良く分らず言っていたことに気づきました。いただきますに動植物に命をいただくという事、坂本さんのような仕事をしている人と料理を作ってくれる人への感謝の気持ちが込められている言葉だということが分かりました。

この授業で自分が沢山の命をいただき支えられ、成長出来る事を学びました。自分が学んだ事を多くの人に伝えていきたいです。

優秀賞

いのち

相模原市立並木小学校 六年 吉田 花苗

今日、私は命の大切さを感じました。世界でたくさんの方が一つの命をもち、がんばっている。私もその一人だっという事がすごくうれしかったし、これからもその一人になろうと思いました。

それを考えるのも今日の耳読があったからです。富弘さんのように、夢はかなわなかったけれど新しい自分を発見したくさんの人を笑顔にさせる、日野原さんのように、百五才まで人のためにがんばって笑顔にさせる、私は命って人を笑顔にするためにあると思います。笑顔で、勇気をあたえ、生きていく、それが命だと思いました。命が誕生する時は必ずみんな笑顔で、たくさんの人が笑ってる。私は、その優しい笑顔にささえられて、今があります。それもお父さんお母さんおばあちゃんおじいちゃん、ご先祖様がいたからで、だれか一人、ご先祖様がいなかったら私は生まれてこなかった。そ

もそも私は約七十三億分の一の命だからその七十三億分の一の命を大切にしたいです。

私は、きのうまでは、命はなんのためにあるのか、考えていませんでした。でも今日の耳読があったから、命は笑顔のためにあると考える事ができました。これからも一つしかない命を大切にして、たくさんの人を笑顔にさせたいです。

優秀賞

『いのち』を大切に作る社会

三浦市立初声中学校 一年 細田 あかり

私たちは、道德の授業で、「いのち」や「生き方」について考える機会がたくさんありました。

まず最初に考えたのは、「相手を大切にする」とはどういうことなのかということです。授業の中で、赤ちゃんが健康に生きるためには、単に栄養を与えるだけではなく、「あなたのことを見ているよ、気にしているよ」というメッセージ（愛情）を与えなくてはいけないということを知りました。人は一人では生きていけないと言います。それは、単に「誰かと一緒にいる」ということではなく、「心を通わせ合う」とことを指すのだと感じました。だから、何をする時にも、心をこめて相手に接することが相手を大切にすることだと思いました。

また、「いじめ」についても何度も考えたり、班やクラスで意見交換をしたりしました。特に「ことば」のもつ力につ

いての意識が高まったと思います。ほんの数秒のことばでも、「いのちを追い詰め、死に至らしめる力」をもつことがあります。また、逆にほんの数秒のことばに「だれかの命を救う」力があることも学びました。自分は平気でも他の人にとって凶器となることばもあることを改めて考え、ことばを発する前に「相手の受け止め方や気持ち」などを先回りして想像することが大切だと思いました。

さらに、総合的な学習の時間では、福祉について学びました。福祉の学習では、さまざまな人の生活を支えるために、たくさん人の制度や支援があることを学びました。福祉は、いろいろな立場の人の目線や不便を想像し、少しでも気持ちよく生活できるように考えることです。それは道德で考えてきたことと同じことだと思いました。

私は、両親にたくさん褒められて育てられました。だから私もできるだけ温かいことばで人と接したいと思っています。人は、誰でも、自分がされたことを自然に相手に返したり、周りに広めたりするものだと思います。だから、みんなが、周りの人に福祉の心で接しながら生活していったら、本当の意味で支え合える豊かな社会になるのではないかと思います。

優秀賞

自分一人じゃない

伊勢原市立伊勢原中学校 二年 山下 穂

(※平成二八年度に書かれた作文です。)

「私たち一人一人の命は、奇跡の連続であり、一生大切にしなければいけないものである。」

授業を行ってくださった先生が言った。私はこの言葉を受け、今までの生活の送り方や、身近でお世話になっている方々への接し方をふり返ってみた。

今まで生きてきて歩んできた十四年間、私はたくさんの人に出会い、学び、新しい発見をつぎつぎ見つけてきた。私はこれを、ただ自分一人で歩き出し、見つけてきたと思っただが、今回の授業を受け、けして一人で道をたどってきたわけではなく、ものすごくたくさんの人達がかかわり、協力してくれたからこそ今の自分がここにいることを改めて実感できた。

赤ちゃんを抱かせてもらったとき、思ったよりも重くて、

すごくずっしりしていた印象が残った。お母さんはこんなに重い赤ちゃんを一生懸命、お腹の中で育て、力強くふんばり産んでいるということを思うと、私が今生きていられるのはたくさんの方の苦勞を積み上げられてできたものだと思った。私は、これだけの奇跡がかさなって自分がいるのなら、次に、また次にと奇跡をつなげていけるように努力しなければならぬ責任を感じた。自分一人で生きていくのではないので自分自身を大切に思い、さまざまな経験をつんで少しずつでも進歩していけるようにしていきたい。

優秀賞

命の大切さを知った二つの出来事

伊勢原市立成瀬中学校 二年 中原 大輝

僕は六年生の初めに母から「家族が増える」と聞き、思わず泣いてしまいました。僕は一人っ子だったので、前から弟か妹がほしいと思っていました。

しかし、その報告の一ヶ月後、母がトイレに行くとき出血してしまいました。心配になり、急いで病院に行きました。僕は留守番を任されましたが、すごく心配で心臓が止まりそうでした。二時間後、母と父が帰ってきました。ふたりの顔を見た瞬間、ぼくは「まさか」と思いました。母が、「流産だったよ。赤ちゃんは死んでしまった。」と泣きながら言うとき、僕は思い切り泣きました。

僕は家族が増えると信じていたのに、まだ顔も見なかった僕が、僕の弟か妹の命を失ってしまった事がすごく悔しかったです。

そして中一の冬、再び泣けることが起こりました。母が再

び、「家族が増えるよ。今三ヶ月だよ」と言ったのです。「今度こそ無事に産まれてきますように」と僕は必死に祈りました。翌年の夏、妹が誕生しました。家族全員が待ちに待った赤ちゃん誕生でした。その時僕は思いました。「僕が六年生の時に亡くなってしまった命も、きっと妹の誕生を喜んでる」と。今では、そんな妹も九ヶ月になり、家族みんなに愛されています。

僕は友達と喧嘩をしたりすると、よく「死ね」などと言ってしまった事がありました。けれど今回僕は命の大切さを心から感じる二つの出来事を通して「死ね」などという言葉は決して許されないと考えています。一つの命を失い、また一つの命と出会った。

僕は命って素晴らしいと思います。

優秀賞

私と大和

神奈川県立相原高等学校 三年 中島 萌里

二〇一五年。私は相原高校に入学し、牛のかわいさに惹かれ畜産部牛プロジェクトに入部した。牛プロジェクトでは、学校にいるほぼ全ての飼育管理を行っている。そこで出会ったのが熊本系褐毛和種の「大和」。大和は、名前を呼ぶと近づいてきたり、顔をすり寄せてきたりなどとても人懐っこく、学校の牛の中で一番かわいがっていた牛だ。

そんな大和と一緒に過ごした時間はたったの二年弱。大和は肉牛。そう、お肉になるために生まれてきたからだ。二〇一七年二月二三日大和が出荷された。大和は私たちが入学する二日前に産まれ、共に過ごしながら成長してきたため思うものも多く、とても辛く悲しかった。出荷後しばらくは、大和との別れを受け止めることができず、味気ない生活を送っていた。このままではいけない。気持ちを切り変えて前に進まなくてはいけないと思っていた時、大和がお肉となり帰って

きた。牛プロジェクトでは生産物の販売を行っているため大和も帰ってきたのだ。かわいがっていた牛のお肉なので自分の手で販売したいと思い私も販売会に参加した。販売会では多数のお客様に来て頂くことができ、すぐにお肉は完売した。お客様からは「おいしかった。」「また食べたい。」など嬉しい言葉をたくさん頂いた。

この販売会を行い、かわいがっていた牛のお肉を食べ喜んでくれた人を見て私はとても嬉しく、おいしく感謝の気持ちを持って食べることで大和も喜んでくれるのではないかなと思った。出荷し会えなくなってしまうが大和のお肉を食べることで私の体の一部になりずっと一緒にいられる気がして嬉しかった。

大和の飼育・販売活動を通し、私は命の大切さやありがたさを感じた。そして、多くの人に命に感謝し食べてもらいたいと思った。だが、急に感謝の気持ちを持つことは難しい。そのため、まず動物に触れ合い魅力を知ってもらいたい。将来は、観光牧場で働き、多くの人に、私たちの命を支えてくれる家畜の魅力を知ってもらえるよう努めたい。